

イタドリの品種選抜に関する研究

(一次選抜と試験供用苗の植え付け)

森林経営課：黒岩宣仁・山崎敏彦

■ 目的

高知県では、中山間対策として高知の食文化として知られるイタドリの地産外商に向けた生産と加工販売に取り組んでいる。これまでイタドリの供給は天然採取が主であったが、食の安全性や品質を保つためには加工の目的に合った優良系統の栽培が必要である。本研究は県下全域からイタドリを収集保存し、県内の栽培に供する多収性優良系統の選抜を目的とする。

本年度は、一次選抜と試験供用苗の植え付けを行ったので報告する。

■ 内容

2021年に高知県内60地域と香川県内1地域から収集保存した152系統のイタドリの親株を4月中旬に一次選抜した。県内のイタドリ生産者の代表や育種の専門家ら数名で検討会を開催し(図1)、収集した親株を精査しながら、①「皮の剥ぎやすさ」、②「茎の中身の厚み」、③「茎の中身の色(鮮緑色)」、④「葉の展開の遅さ」、⑤「繁殖力(地下茎の広がり)」、⑥「多収性(採集時の茎の太さと数)」などに着目して38系統を選抜した。

ただし、⑥の採集時に生育地で計測した茎数や最大根元径は、個体の年齢や生育環境などに影響されるため系統本来の特性を表しているとは限らない。このため、多収性系統の可能性を探るための参考とした。

以上の結果を受けて、2021年に準備した152系統の挿し木苗の中から一次選抜系統を4月下旬に鉢上げして試験供用苗(1系統につき15個体)をガラスハウス内で7ヶ月間育成した(図2)。試験圃場は、2022年3月上旬にバーク堆肥3t/10aを混入して土壌改良を行い、さらに2022年11月上旬に鶏糞ペレット(窒素3%・リン酸4%・加里3%・石灰16%・C/N比8)500kg/10aを投入して攪拌した。1ヶ月後の12月上旬に畝あげをして防草用の黒マルチを張り、試験供用苗を1系統につき10個体(5個体を2カ所に分散)を植え付けた(図3、図4)。また、対照系統として、高知県の既存の優良系統「鏡1号」と和歌山県の選抜優良系統「東牟婁3」を同様の方法で育成し植え付けた。試験供用苗は合計40系統400個体となった。

■ 成果

図5に親株採集地及び一次選抜系統の採集地を示した。また、図6に採集親株及び一次選抜系統の茎数と最大根元径を示した。一次選抜で選抜された系統は、採集地域に偏りがなく、県内の広域に分散している。また、採集時点での親株の形状は、茎の最大根元径が20~30mmで茎数2~7本の系統が多いが、中には最大根元径が28mmで茎数が13本の系統や最大根元径が35mm以上で茎数が5本以上など、多収性系統の可能性のある個体が含まれている。

選抜されなかった系統の中にも、皮が剥ぎやすくて茎数が多く、最大根元径も太い系統があったが、その原因の多くは「茎の中身が赤い」、「茎の中身が薄い」などであった。



図1 イタドリの一次選抜の現地検討会



図2 一次選抜系統の育成（鉢上げ）状況



図3 一次選抜系統の生育状況
(2023年3月)



図4 一次選抜系統を植え付けた試験圃場の全景
(2023年3月)

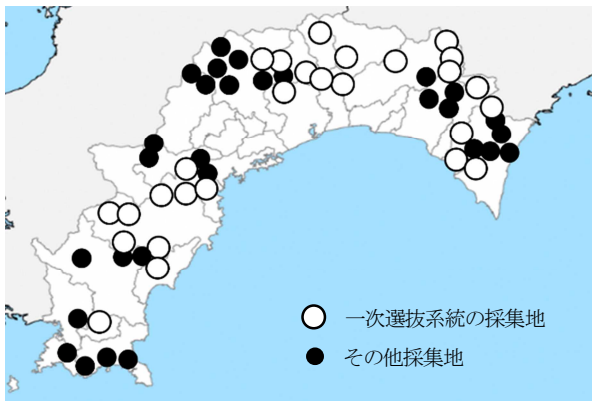


図5 親株採集地

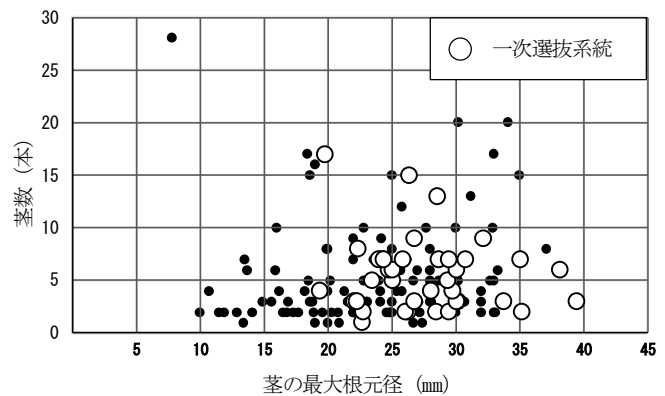


図6 親株の茎数と最大根元径（採集時）

■今後の計画

3年後の二次選抜に向けて圃場に植え付けた試験供用苗の育成（特に病虫獣害からの防護）を行うとともに、根茎が広がって系統が混じらないよう境にあぜ板を埋設する。3月から4月の収穫期に数日おきに茎数、茎の長さや太さ等を計測して、早晩性や個体サイズの比較を行う。